



監修

佐佐木信綱 新村 出  
辻善之助 藤村 津田左右吉  
作和辻哲郎

# 東海道中膝栗毛

笹川臨風校註

朝日新聞社刊  
日本古典全書

日本古典全書第五十七回配本

「東海道中膝栗毛」 笹川臨風校註

昭和二十八年十一月十五日初版發行

印刷所 明善印刷株式會社

發行所 朝日新聞社（東京都千

代田區有樂町・大阪市北區

中之島・小倉市砂津）

定價 三〇〇圓

# 目次

## 説

鏡を繼ぐもの……………三

鏡と小鏡と續世繼……………五

つ筆が執られたか……………七

鏡の描くもの……………一〇

定される作者……………一九

國……………四〇

例……………四八

久……………五一

録……………五一

次

今鏡の諸傳本……………二五

畠山本と尾張本など……………二八

白鳥の唄……………三三

いままでの研究……………三九

らぎの上第一

雲井

六〇

望月

七五

子の日

六四

菊の宴

七八

初春

六八

黄金の御法

八〇

星合ひ

七一

司召し

八三

らぎの中第二

手向

八九

所々の御寺

一〇九

御法の師

九一

白河の花の宴

一一一

紅葉の御狩

九五

鳥羽の御賀

一二五

釣せぬ浦々

一〇〇

春の調

一九

玉章

一〇四

八重の潮路

一二三

らぎの下第三

男山

一二七

内宴

一四一

蟲の音

一三三

をとめの姿

一四四

大内わたり

一三六

鄙の別れ

一四六

二七

八九

六〇

五五

園の匂ひ……………一四九

二葉の松……………一五三

上第四……………一五六

波……………一五六

はちすの露……………一七五

の匂ひ……………一六一

小野の御幸……………一七六

見の雪のあした……………一六三

薄花櫻……………一七九

のかへし……………一六九

波の上の杯……………一八二

河のわたり……………一七一

宇治の川瀬……………一八四

甲第五……………一九四

笠の松……………一九四

飾太刀……………二一〇

の露……………一九九

苔の衣……………二一六

の初花……………二〇三

花の山……………二二〇

千鳥……………二〇五

水莖……………二二五

合……………二〇八

故郷の花の色……………二二七

ト第六……………二三一

合の歌……………二二二

旅寝のとき……………二二八

人の遊び……………二三五

弓の音……………二四二

次

次

四

雁がね……………二八六

花散る庭の面……………二八六

ますみの影……………二五二

宮城野……………二七二

竹のよ……………二五六

志賀のみそぎ……………二七八

梅の木の下……………二六〇

の源氏第七

二八三

うたた寝……………二八三

紫のゆかり……………二九九

堀河の流れ……………二八七

新枕……………三〇三

夢の通ひ路……………二九一

武藏野の草……………三〇七

根合……………二九四

藻鹽の煙……………三二四

有栖川……………二九六

たち第八

三一七

源氏の御息所……………三三七

月の隠るゝ山のは……………三三九

花のあるじ……………三三〇

腹々の御子……………三三三

伏し柴……………三三六

詰第九

三四四

鞆たづ……………三四四

祈る験……………三四七

歌

三五

賢き道々

三六

の道

三五

第十

鳥の打開

三六

作り物語のゆくへ

三六

良の御代

三六

東海道中膝栗毛

笹川臨風



## 解 說

### 東海道の往來

江戸に徳川幕府が開かれてから、東海道は上方と江戸とを結ぶ交通往來の大動脈となつた。參勤交代の大名旅行は、金紋先箱の行列もいかめしく、武門が往來するばかりか、あるひは商賈が往き、桑門往き、歌俳諧の風騷人往き、六部巡禮、鹿島の事觸れ、月に三度の飛脚が往來する。出女に人り鐵砲の禁は厳しくても、大神宮への拔參りの人人、また富士詣などもあつて、一路百二十餘里の間は往來の人人で相當に賑やかであつた。短停長驛五十三、それらの宿宿には大小名たちの泊る本陣や、これに次ぐ旅館の脇本陣があるし、木賃宿まで並んでゐた。各驛には宿引をしたり、接待をする出女、宿の酒間枕席に待るおじやれといふ女どもが、粉白黛綠凝らして旅ゆく人を呼びとめるに忙しい。

交通機關としては、馬があり、駕舁・雲助・川越人足・馬子らが、驛路の便をはかつてゐたが、一方街道の煩ひは、旅人の風を装ふ護摩の灰や掏摸で、特に役者や婦女子の癪であつた。

名物にうまいものなし、といふが、府中の阿倍川餅、丸子のとろろ汁、日坂の蕨餅、瀬戸の染飯、日川

の茶飯をはじめ、それぞれに名物土産も多く、旅情を慰めるものもあつた。

蕉門の森川許六の旅の賦にいふ。旅店のさま、上段に書院床、劍菱のすかし、火のない火燵にやぐらをかけて、門口に入湯桶を傾けてすゑてゐる。底に小砂のさはるのは、昨夜の客が洗つた残りの砂でもあらうか。出女の縦縞はその春秋を知らない。床の根<sup>ね</sup>太板敷きは落ちて、隅隅まで畳も敷いてはゐない、天井襖は雨洩り<sup>り</sup>でしみがつき、鐵行燈の光もうすく、燈心がちらついてゐる。錢賣、草鞋賣などにせがまれ、やうやう枕をとつて横になると快い寝入りばなに、ふと馬士の聲に夢を破られる。街道の賣りものに餅酒のないところはない。磨針峠の餅を食はなければ、未來焰魔王の前に出るといふ。寒空にも冷素麵をすすめるのは逢坂の茶屋。饅頭のほかほかと見えるのは見附の臺であると。

まことに、江戸時代の東海道中は人生行路宿縁の縮圖であつた。

### 道中物の出版

このやうな東海道往來の頻繁につれて、街道の名所圖會や案内記をはじめ、旅日記類の道中物があらはれ、逐次出版された。

寛政九年十一月、まづ秋里離島の「東海道名所圖會」六冊が刊行され、さらに「東海道圖鑑」「東路の記」などの道中記もこの前後に相當出版された。遠近道印<sup>とんしんどういん</sup>の「東海道分間繪圖」は既に元祿年間に上梓さ

れて、東海道に對する知識も普及されてゐた。天保四年から歌川廣重の錦繪、保永堂板の東海道五十五枚は逐次發行せられ、享和二年から發行の十返舎一九の「東海道中膝栗毛」と並んで東海道の權威となつた。

「東海道中膝栗毛」の初編がひとたび世に出ると、非常な喝采を博して、翌三年に後編二冊を出し、引きつづいて三編・四編・五編と、つひに八編三冊、後に追加した發端とあはせて二十四冊におよんで完成した。飽くこともない出版元の催促に、一九もよい氣になり、金毘羅參詣・宮島詣でと足を延ばし、歸路の本曾街道にかかると、善光寺・草津入湯と道寄りをして、文政五年江戸歸着に至る最後の十二篇まで、前後二十一年の長い旅行を畢へて、彌次郎喜多八の名は讀書界を風靡し、男女老幼も膝栗毛宗の信者となるほど天下を鳴らした。それはあたかも、廣重が隸書東海道や、行書東海道・狂歌入東海道をはじめ、十餘種の東海道を描きあげたばかりでなく、近江八景や、京都名所などを描寫し、出版元との紛糾からして、溪齋英泉が書きかけて中絶した本曾街道六十九次も、廣重の手によつて物の見事に有終の美をなしたのと、やや類似したところがないでもない。

## 一九の略歴

「東海道中膝栗毛」の著者、十返舎一九は重田氏、名は貞一さだかずまた與七といひ、幼名は市九、駿州府中の人で、若い時江戸に出で小田切土佐守に仕へ、また従つて大阪に赴き、辭任してから後に、同地のある材木

商の女婿となつたが離縁となり流浪の身となつた。寛政六年の秋、ふたたび江戸に出て、通油町とすあなの地本問屋、葛屋重三郎の食客となつて、錦繪に用ゐる奉書にドウサなどをひく務めをしてゐた。その性、滑稽を好み、浮世繪なども學んでゐたので、葛重の誂へで、「心學時計草」といふ三冊ものの臭草紙を綴り、畫も一九が自畫して寛政七年に新板した。この冊子の趣向は、石川五老齋（雅望・宿屋飯盛）が思ひついて葛重に説き、葛重はやがて一九に誂へて綴つたものといふ。「時計草」は吉原に於ける遊女と客のやりとりを書いたものであるが、これに心學と題したのは、當時心學がはやつてゐたといふことよりも、禁忌を憚つて紛らしたのだといはれ、心學と題した臭草紙の多かつたのは、そのやうな意味で流行したものである。

この「心學時計草」が處女作で、すこぶる評判がよかつたので、これから年毎に多くの臭草紙を作つた。はじめは多く自畫で板してゐたが、その畫が拙かつたからでもあらうか、後にはみな別人に畫かせた。

かくて寛政の末に至つて、長谷川町にある町人某の家に入夫として數年を送つたが、またそこを離縁して、さらに妻を娶り、通油町の裏の地本問屋の會所を預つて、そこを住居とした。後の妻に女兒出産し、この娘が二八のころから舞踊の師となつて親の生活を助けたといふ。

性酒を嗜むこと甚だしくて、生涯言行を屑よしとしない浮薄の浮世人で、文人墨客の如くでないから、書賣らに愛せられて、暇のあるをりには他の臭草紙の筆耕をさへして旦暮に給し、その半生を戯作で送つたのはこの人のほかに多くはない。しかし臭草紙には當つた作がなかつたが、享和二年より書き始めた膝

栗毛は時好にかない、彼の名聞が式亭三馬に勝つたのは實にこの戯作によつてである。はじめは通油町の村田屋次郎兵衛が印行したが、そののち村次は衰へ、その板を賣つた。膝栗毛の評判はなほ衰へなかつたので、一九は編毎に潤筆十餘金を得て、趣向のためにをりをり遊歴といつては板元から旅費を出させたといふ。村農野嬢の解きやすく笑ひを催すのを欣ぶばかりでなく、大人君子も膝栗毛のやうな害のないものを賞美したから、二十餘年似たやうな趣向の冊子を、流行させたのは前代未聞のことである。

文化初年に、「繪本太閤記」に擬へて「化物太平記」といふ臆草紙を作り、お咎めによつて罪せられ、手鎖五十日で赦された。このことは一九ばかりでなく他の畫工にも多かつた。文政十二年の春三月の大火に會所も類焼したので、長谷川町のあたりにある新道の裏屋に家を借りた。このころから手足が偏へに不由となり、つひに天保二年八月七日、六十七才でつぎの辭世を残して歿した。

この世をばどりやおいとまにせん香とともにつひには灰左様なら

「物之本江戸作者部類」に七月二十九日歿とあるのは誤りである。法名は心月院一九日光居士といひ、淺草善龍寺地中の東福院に葬られた。翌三年遺族門人が集り、向島長命寺の境内に記念碑を建てた。

一九の行狀は、彌次郎兵衛喜多八に似てをり、戯作もこれから思ひついたといはれてゐる。逸事としては、深川木場の一豪家に招かれての歸り路、湯槽を頭に被つたといふやうなこともあり、また自分の室内に調度品、時候の行事を描いて壁に貼つたと傳へられるやうなこと、年始の禮に來た書賣に入浴をすすめ

て、その衣服を着用して年始に廻つたといはれること、死ぬるとき花火を懷中して火葬のとき爆發させたところあるやうな類は、數へきれないほどあるが、その多くは信じ難い。彌次郎兵衛喜多八の滑稽が、かれの傳記に混入したと見られるものが多くあるらしい。さきの年、ある大名が一九の娘がよく雜劇の踏舞をすることを聞き、妾に持ちたいといったのを、一九は斷つて、娘が結婚したら自分の生活はどうなることかと、つひに許さなかつた、といふやうな面もあつた。

その十返舎と稱するのは、大阪にゐたとき、志野流の香道を學んでから黃熱香の十がへりによつたといひ、幼名市九といふのも、十字を折つたものともいはれてゐる。大阪では並木千柳・若竹笛窮とともに近松餘七と稱して「木下このした蔭かげ挾けん間かん合あ戦せん」の淨瑠璃を合作してゐる。

その門人には、半九・三九らがある。十字亭三九は糸井鳳助といひ、師の歿後に金を未亡人に贈つて、二代目十返舎一九と稱して、「奥羽道中膝栗毛」を編述しゐる。

### 東海道中膝栗毛

一九はどうして「東海道中膝栗毛」の著作を思ひついたか。よし粉本を見出しえたとしても、東海道を材料としたのはなにによつてであるか、すなはちこの書の著作の動機はなにであつたらうか。

既に略歴において知れるやうに、一九は駿府から江戸に來たり、あるいは大阪に赴き、また江戸に來る

など、東海道を往復して、旅宿の状態、旅情の光景を實見したのは、自ら膝栗毛の動機となつたのであらう。この點は廣重と同じ動機から出てゐるものと思はれる。それとともに、特に「東海道名所記」「竹齋」などに刺戟されたものが多かつたであらう。

當時、烏丸光廣の作といはれる寛永年間板の「竹齋」、貞享四年板の「新竹齋」、および淺井了意の著で萬治元年板といはれる「東海道名所記」といふものがあつて、これに依據したことは明らかである。

山城の國に竹齋といふものがゐた。世に用ゐられないので、にらみの介といはれる從者を伴なつて諸國を遊覽しようと、まづ京の名所舊跡を經廻り、尾張の名古屋に留まつて「天下一やぶくすし竹齋」の看板を掲げて、さまざまの頓智頓才をもつて患者に接した。鍛冶屋の主人の眼に入つた鐵屑を磁石で吸ひ出させたり、妊婦の咽喉に青梅のつまつたのを、吸出し膏藥を口に張つて吸ひ出させたりしたのは無事であつたが、子供が井戸へ落ちたのを、戸板に吸出しを張つて引き揚げようとしたのは、まんまと失敗に終り、子供は死ぬ、親は怒つて打擲するなど、つひに名古屋にも住み兼ねて、東海道を狂歌をよみながら江戸に下る、といふのが「竹齋」の筋。「新竹齋」は竹齋の子の簡齋、にらみの介の子のねめ介の兩人が、父のあとを追つて江戸下りの氣散じの旅を書いたものである。

いづれも京都から江戸への下向を寫してゐるが、「東海道名所記」は江戸から京都への旅である。この書六冊は、元祿板「増益書籍目錄」によると、洛北本性寺昭儀坊釋了意の作であるとある。了意は檜雲子